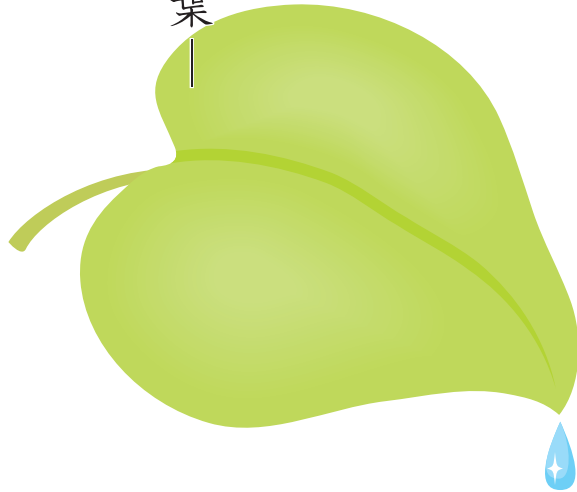


「絆」

— 伝え合いたい言の葉 —



楽しんでおいて

「楽しんでおいて。」母の口ぐせです。そして、私は、「ただいま。楽しかったよ。」と帰るのが口ぐせです。でも、本当は、楽しいことばかりあるという訳ではありません。私が「楽しかったよ。」と言うと、母がうれしそうな表情をします。しかし、中学生になった今、この楽しいという言葉に言霊があると感じるようになりました。

苦しい持久走大会の練習の時、友人に「どうやって走ったらいいの。」と聞いたら、「楽しんで走ればいいよ。」と答えてくれました。私も苦しい練習で楽しみながら走ってみると、不思議なことにタイムが縮み、嫌いだっただけの持久走も少しだけ好きになりました。

毎日を楽しんでいると感じてほしいという母の言霊が、中学校生活を楽しいと思える私にしてくれたと思います。

ありがとうございます、お母さん。

初めて認めてくれた

「三年間、ありがとう。」
県大会で負けて帰ってすぐに父親に言った。

父は、「お前が頑張っただけじゃん。」って私に何気なく言って笑ったけど、この三年間で父は試合を見に来たこともないし、準優勝した日だって、

「何で○○に勝てないんだ。」って怒ったので、ケンカして、認めてもらえないのが悔しくて家出をしたこともあった。

そんな父が私の頑張りを初めて認めてくれた。私は脱力感から泣いた。泣いて泣いて。だけど父は「頭ん中で勝ったって思えばよかいよ。」って笑った。負けたことは確かに悔しかった。でも、何より父の優しさが涙を流させた。

父と私は、仲よしだけど噛み合わないことの方が多くてケンカをたくさんする。家は父子家庭だし、親は一人だけど、今日からまた頑張れる気がしたよ。

大人への階段

お母さんもね、沢山沢山悩んでた。今思えば、なんでもないこと。でも今のあなたの年の時は、成績のこと、友達との関係、親や先生への不満、好きな男子とのこと。すべてが大事ですべてが悩みだった。大人になると上手な逃げ方、上手な気持ちの切り替え方を覚えていくけど、それってちょっと悲しいことだったりする。でも、そうしないと上手に生きていけない世の中だったりするから、沢山悩んで沢山泣いて、そして沢山笑って、ゆっくり大事に大人への階段を上っていった。そして、忘れないで。お母さんはあなたの最初の友達だよ。

大人もかつて子どもだった

幸と不幸は帳尻が合うようになっていく……。四十年以上生きてみると、何となくそんな気になってくるけれど、十年そこそこ生きただけの君たちにはなかなか理解できないことだと思う。大人になってしまった私たちは、自分の体験をふまえて、転ばぬ先のツエとなるように、様々な言葉を君たちに投げかける。でも、その殆どは、うるさい、煩わしい雑音にしか聞こえないのだからね。

でも、わかってほしい。私たち大人も、かつて子どもだったことを。今の君たちと同じように悩み、苦しみ、また喜び、様々なことで、親や大人たちに反発したことを。今、大人となり親となってしまった私たちは語りかける。子どもである君たちに。よりよき人生を、悔いなき人生を送ってほしいから。どうかほんの少しでも、耳をかたむけてくれないか。

お母さん見守ってて

元気になっていますか。私は元気だよ。お母さんに見てほしくて毎日がんばってるんだ。いつもお母さんのいない朝を迎えるけど、未だにいなくなった気がしないよ。心の中ではいつもどこかにお母さんを探している自分がいる。いるはずもないのにね……。そのさみしさに涙を流してしまうこともあるけど、お母さんはそんな私の姿見てもうれしくないよね。お母さんには安心して見守ってほしいんだ。だからいつも笑顔でいられるようにがんばるから。いつかまたお母さんと会えるのを楽しみにしているね。その時はいっぱいいほめてね。また今日も一日、がんばるね。

お父さんへ

いつもいろんな所へ連れていってくれて、ありがとう。その度に感謝しています。でも、日常生活の会話の中に、お父さんの声が入っていなくて、とてもさみしいです。お父さんは、私が迷惑だったから家を出ていったんですか。お父さんは、何が嫌で、この家を出ていったんですか。理由が分かりません。それとも、お母さんとけんかでもしたんですか。とても気になります。食卓の一つ。だれも座っていないイス。ふつう、お父さんがそこに座っていないければいけないイス。もう今は、荷物が置いてあります。もう一度言います。さみしいです。早く帰ってきてね。

私もそうだった

解かる、解かる、そうだよね。

私もそうだったから。

駄目でしょ、そんなことしたら。

でも、私はもっとひどかった。

母さんも三十年前は中学生だったんだよ。

昔から母さんじゃないんだよ。

あなたが大人になったとき

あなたを見ていると、自分が中学生だったころのことを思い出します。友達や先生や親、周りの人たちの顔色をうかがい、自分のカラを破れず思うように楽しめなかったこと。あなたは私とは違い、友達とも楽しみ、先生を信頼し、親の私にもいろいろなことをわだかまりなく話してくれていますね。

でも時々、表情の中に昔の私と同じ思いが見えるときがあります。きっと、心の中が散らかってしまって、自分で思うように整理整頓ができていないのかなと感じています。

あなたが大人になったとき、中学生だったころの自分をほめられたらいいですね。今、学んでいることは、あなたの将来の家族、あなたたちを取り巻く社会に必ず役に立つときがくると信じて、上手に吸収していきなさい。つまずいて立ち止まったときには、肩を組んで励ますからね。

温かい手

ひーちゃんは、お母さんにそっくり。

「どこが？」

「心がそっくりってこと。がまんするところとか。」

この話をするとき、お母さんと私は手をつなぐ。

「いつもありがとう。」

そうやって、お母さんはニッコリ笑った。

あのときのお母さんの手はとっても温かくって、でもどこか悲しげだった。

どこか痛いのか？

なんでそんな顔するの？

言葉の代わりに、つないでる手に力を込めた。

ありがとう。

無理しないで。

お母さんへ

お母さん、いつもありがとう。

あまり体が丈夫な方ではないね。でも、私はそれでもいい。ううん、それでいいんだ。一つ一つのことや幸せに感じられるから。他の人には普通のことなんだろうね、多分。近くの小さなお店にお母さんと一緒に行けた。それだけで本当に、本当に充分なんだよ。お母さんは、優しいから。多分、私のために無理していろいろやってくれているんだよね。他の友達のお母さんたちと同じように。精いっぱい。でもね、私は無理してほしくない。外に出られるようになった、それだけでいい。ゆっくりゆっくり元気になっていけばいい。今、行けないところは今度行けばいいんだから。今、できないことは今度やればいいんだから。お願いだから無理だけはないで。

支えられ、励まされる日々

あなたに会えてよかった。
 あなたを授かったとき、私の体に病気が潜んでいることが分かり、命の選択を迫られた。私の命とあなたの命が擦れ違うことを恐れた。

新しい命は幸運の女神となって、私に生きる勇気と頑張る力を与えてくれた。
 あなたの笑顔に支えられ、励まされる日々、あなたのやさしさはいつも私を幸せにしてくれる。

口答えをするあなたが時々悪魔に見えたりする。でも、悪魔のあなたもとても愛しい。受験勉強の合間を縫って、「無理しないでね。」そう言いながらさりげなく、家事を手伝ってくれる。心が痛いほどうれしいのに当たり前だと思っていたから、うれしくてうれしくて素直にありがとうと言っただけでなかった。ありがとう○○ちゃん。あなたに会えて本当によかった。母

親の成長期

夕方、帰宅の車の中で、子どものことをあれこれ考える。順調な一日であったろうか？

「ただいま。」

「おかえりなさい。」

心地よいいつもの会話の後、決まって私はイライラする。子どもの返事から、期待していた変化も成長も感じられない……。

隣の芝生ではないが、最近、隣の子どもがすばらしく良く見える。

この頃私はあせている。葛藤している。自己主張を始めた思春期の子どもと同じように、親も成長の時期を迎えている。

お互い、言葉にうまく気持ちを乗せられないが、分かって欲しい。あなたが私たちの希望だから。あなたが愛する。我が子だから。

ケンカはやめて

お父さんもお母さんも、ここまで自己中とは思わなかった。もううんざりだよ。

今年に入って、私はそう言った。二年の時に、先生から言われて感謝の手紙を書きましたね。産んでくれてありがとう。これからよろしくね。なんて、ありきたりな言葉ばかり並べて書きました。小学校低学年のときは、二人ともいない日は、ばあちゃん家に泊まってさびしい思いもしました。そのさびしさを癒すように、今の反抗期があるのかもしれない。

だからせめて、私の前だけでもケンカをするのはやめてください。二人のケンカを見ると、なぜか分からないけれど、心が痛みます。お兄ちゃんだってあきれて止めることすらないことに、私の心が痛んでいることに気付いてください。

母と見る風景

悩んでいるときに見る景色に、私は不思議と心ひかれます。

一日のうちに何度も変化する空は、昼はきれいな水色、夕方はピンク色に染まり始めて次第にオレンジに変わり、やがて深い青に、夜は月や星が、黒を背景にキラキラと光ります。儂ほかなさが伝わってくるような、悲しみが感じられるようなシンプルな風景です。見ていると自然と涙が溢れてくるような優しさがあります。それは三年前に他界した母のイメージと重なります。

悩んで辛いとき私は景色と話します。私が見る景色を母が見て、景色が母の言葉を優しく伝えてくれるのです。

感動をありがとう

「おとうさんと、おかあさんみたい。」

道端に並んで咲いていた二輪の草花を見ながら、幼いあなたは言いました。三歳にして父を亡くしたお母さんには、決して発することのできない感動の一言でした。

あれから十年余りが過ぎ、毎日のように家に帰り着くなり、今日一日の出来事を熱く語ってくれるあなたがいます。良いことも悪いことも何でも話し、いつもプラス思考なあなたは、今でもお母さんに感動を与え続けています。

いつも感動をありがとう。そしてこれからもいっぱい話してね。

今日も、あなたの帰りを首を長くして待っています。

大丈夫だよ

「大丈夫だよ」この言葉に助けられ、支えられた夏休み、おかげで留守番を任せ、安心して働くことができました。

「じゃ、お願いね」の頼み事も、多少イヤな顔はするものの、段どりを決め、弟たちに仕事を分担してやってくれるのはやっぱりあなた。

弟たちは「隊長」と呼んで、頼れるお兄ちゃんに一目置いていきます。

かあさんも、三人の兄弟力を固く強いものにしてくれたと「隊長」の存在を頼もしく思い、「隊長」の「大丈夫だよ」に感謝しています。

いつまでも「隊長」中心に、兄弟三人が居心地がいいと思える空間でありますように。

「大丈夫だよ」

夏休み、かあさんにとって「隊長」からの何より嬉しいプレゼントでした。

弟ができてわかったこと

「赤ちゃん、できてた。」ある日、母から電話があった。「産んで！」私は迷わずそう答えた。母のお腹の中に十四歳はなれた私の弟ができた。そして私が中学二年生の秋にその子は産まれた。あの子ね、歳がはなれすぎてて、弟って感じがしないんだ。むしろ自分の子供みたい。最近子育て手伝ってて思ったの。子育てってすごくすごく大変なんだね。知らなかったよ。お母さん、いまのあの子に接してるみたいにながれたいに私が小さい時にも接してくれてたんだよね。そんなこと知らずに大きくなった今でも反抗ばかりしてごめんね。これからはいろんなこと手伝うよ。そういえばそろそろあの子の一歳の誕生日だね。一緒にケーキ作ろう。

大好きな笑顔

四人兄弟の末っ子に生まれた貴方はいつも皆に優しくされてきました。そのせいか、「人」が大好きで、人見知りもしない元気な男の子に育ちました。いつも走り回り、笑顔の絶えない貴方に一抹の不安を抱きながらも、貴方の笑顔は我が家のオアシスになっていました。「人」を疑わない素直さは、今の時代に即していないのかもしれない。でも、いつまでも幼さの残る貴方の笑顔は「人」としての原点を感じます。仕事から疲れて帰宅すると、「お帰りなさい。」と笑顔で迎えてくれ、癒してくれる。苦手なことが多いけれど、一生懸命手伝いをしてくれる。辛いことも哀しいことも貴方の笑顔が慰めてくれる。これからが大変なのかもしれない。でも、その笑顔がきつと貴方自身を支えてくれるよ。優しいその顔をずっとずっと大切にね。

何でも話してよ

「何かあったの?」「悩みでもあるの?」
と聞くと決まってあなたは答える。

「別に」と…。もう少し話してほしい。

あなたの本当の気持ち聞きたいと思っ
る。

何でも話してよ。あなたは私たちの大切
な子供なんだから。でもこれだけはわかっ
てほしいと思うことがある。周りの大人た
ちはあなたたち皆の味方だから、もし親に
も言えないことがあったらいつでも相談し
ていいと思う。

それを大人の人たちは温かく受け止めて
守ってくれる。

一人で悩まないで。もう少し甘えてもよ
いと思う。

最高の一言

「早く家に帰って、みそ汁食べたい!」

と、ある日突然言われました。

娘には、申し訳ないのですが、料理があ

まり得意ではない母親にとって最高にうれ

しい一言です。

「またがんばって、『おし大豆』入りのみ

そ汁をつくらうかな。」

と小さくガッツポーズをしてみました。

平成21年度「こころの言の葉」コンクール 入賞者一覧

大 賞

中学生の部	親 の 部
末 廣 伶	平 澤 智 子

準大賞

中学生の部	親 の 部
下御領 侑 椰	濱 上 千 秋
東 工 貴	上 山 ゆかり

優秀賞

中学生の部	親 の 部
八 木 詩穂香	土 橋 洋 二
後 藤 秀 仁	平 山 由 美
綾 部 有希子	窪 さとみ
藤 崎 利 紗	淵 田 公 美
木 田 夕 菜	内 泉
山 下 沙 耶	谷 口 礼 子
中 崎 仁 惟	竹 迫 雅 代

入 選

中学生の部	親 の 部
肥 後 成 美	雨 宮 智 子
四 位 歩 美	永 田 ともみ
満 園 大 輔	榎 田 郁 美
貴 島 さくら	高 松 智 子
水 口 貴香子	田 邊 留 美
矢 野 旭 人	千代森 美由紀
山 元 杏 里	藤 井 由紀子
藤 崎 美 波	竹 原 尚 子
津 曲 恵 利	坂 元 美 香
黒 木 咲 花	山 下 里 美
新 山 奈理子	寿 福 理 子
今 村 仁 美	田 原 良 子
前 田 海 晴	嶋 崎 加与子

応募総数:12 931点

審査員講評

審査委員長

千々岩弘一 先生

互いを大切に思う者同士の真心の「言の葉」に、今年もまた表現しつくせぬほどの「感動」をいただいた。本コンクールの役割は、「こころの言の葉」を綴る機会を提供し、保護者と生徒の「関係づくり」を支援することにある。平成一五年度から始まった本コンクールは、生徒や保護者だけでなく、年毎に地域社会に受け入れられ多くの反響をいただいている。お陰様で、確実にその役割を果たせつつあるといえる。

ただ、我々は、本コンクールの応募作品から、「感動」だけでなく、「今」を生きている中学生や保護者の「自分」の姿や彼らが生きる「家庭及び地域社会」の姿を受け止める必要があるように思う。我々は、言葉で考え、想像し、感性を育み、感情を生み出し、価値観や思想を形作る。我々は言葉に育てられ、言葉の使い方、「自分」を表現している。したがって、本コンクールに寄せられた「言の葉」には、中学生や保護者が「家庭及び地域社会」でどのように育てられたのかということが表れており、彼らが今の「自分」をどのように生きているのかということが表れていると捉えることができる。

本「作品集」を通して、「感動」を共有すると同時に、彼らの姿や「家庭及び地域社会」の姿を捉え、我々の「姿」を考える契機にしていたければ、本コンクールの役割に新たな頁が加えられることになるにちがいない。

鹿児島国際大学教授

坂尾加代子 先生

素直になれない自分、親への不満、悔しい思い……など、思春期特有の親と子の関係がリアルに表現されて始まる「言の葉」も、そのほとんどが、最後には、日頃の態度へのお詫びと、親や家族への感謝の言葉で結ばれています。こうした心の繰り返しをしながら、今を生きている子ども的心情や、日常では見られなかった「やさしさ」に触れることができるのは、まさに「こころの言の葉効果」ではないかと思えます。

「生まれてきてくれてありがとう」にまるでこだまするかのように「産んでくれてありがとう」と「の」の音が聞こえてきて、親と子の、強い絆を再確認することもできました。

一方、今の社会状況を反映するかのようの子どもたちが、大人社会の「事情」の中で、厳しい現実さらされながら生きていかざるを得ないという状況も見受けられ、それを受け止め、懸命に頑張っている子どもや親の姿に出会うたびに、心の中でエールを送りつつ、胸が熱くなりました。

最も印象に残ったのは、「勇気を出して言ってみよう。自分の何かを変えるために」の一文です。ここに、「こころの言の葉」を通しての成長を見る思いがしました。「人を大切に思うことが人を育てる。」ということを実感できた審査でした。

市「さつまっ子」育成市民会議副委員長

岩松マミ 先生

「子どもじゃないけど、まだ大人でもない自分がいる」。まさに「言の葉」の中学生の心境にびつたりの文章だと思った。

「お母さんの笑顔はエネルギーをくれるよ」「私はお父さんみたいな人を好きになるでしょう」。あら、かわいい、と思って読み進むと、「なぜ私なんか生んだんだよ」「お前（親）のせいで家庭が楽しくないんだよ」と、反抗期真っ盛りの危険地帯に足を踏み入れている。春風と暴風がくるくると入れ替わる。

痛いほどの子どもたちの純粹さに心を打たれ、同時に大人への気遣いにはっとする。子どもだって多くのことをこらえて生きているのだ。

家族って一体何だろう。今、機能不全に陥っている家庭が増えているとの指摘がある。「言の葉」で、親子のきずなを再確認でき、ほっとしている自分がいる。

子どもは未来への光だ。国の子ども手当など、やっと子育てに注目が集まっている。大人として何ができるのか、何がやれるのか考えてみたい。子どもが心豊かに暮らせる社会は大人にも住みやすいのだから。

最後に気になるのは子どもの作品数に比べ、親の作品が少ないことだ。子どもの手紙は保護者に打ち返されているのだろうか。思いが一方通行では寂しい。

南日本新聞社編集委員

山元一八先生

七年目を迎えた本コンクールに、国立・公立・私立合わせて四十一の中学校から一一、九三一点という数多くの作品が寄せられたこと、殊に中学生諸君の応募数が年々増加しつつあることは大変喜ばしいことである。平成十五年に新規事業として始まったとき、応募総数が三、三三六点であったことを思うとき、改めて市当局の御尽力と各学校における御理解と取組、生徒諸君の努力に対し、心からの敬意を表せずにはおられない。

多情多感、思春期の真つ只中にある中学生諸君が、自分らしく生きることを目指して必死にもだえ苦しんでいる姿が、応募された短い文章の行間に滲(にじ)み出ている。「わたしを見つめて!」「わたしを認めて!」「無理しないで!」「ありがとう!」「ごめんさい!」等々、彼らのつぶやきであり、時に心の底からの絶叫であつたりする。

社会が、経済性・合理性・効率性・高速性の追求に奔走するあまり、青少年の人間性形成に最も大きな影響を与える「家庭・家族」が、今やその機能を失いつつある中では、子どもたちのこうしたつぶやきや絶叫は、誰の耳にも心にも届くことなく、子どもたちの孤独は一層深まっていく。親や大人や教師は、心を澄ましてつぶやきや絶叫に気づくべきである。本誌が各場で十分に活用され、新たな「気づき」の一步が始まり、「想い」が伝わり深まっていくことを期待したい。

元公民館長

遠矢仁司先生

離ればなれの家族に会いたいと願う子ども親の仕事や家事での疲れをねぎらう言葉。日頃の反抗的な態度をわびる言葉。

寄せられた「こころの言の葉」作品には、一見何気なく過ごしているようで、しっかりと自分を見つめ、今の真実の気持ちを書き綴っており、読めば読むほどに感情が高ぶり、胸が熱くさせられました。心の琴線に触れる一つ一つの作品を審査することは、大変難しいことでした。

今を精一杯生きている中学生が、家族の強い絆を感じながらも、自分をしっかりと見ていてほしい、信じてほしいと訴えているようでありました。心配しなくても親は子を信じているし、これから進むそれぞれの道をしっかりと歩んでいけるように気を配っています。途中、たとえ道につまずいても、きつとさりげなく静かに手をさしのべてくれると思います。

今の気持ちをずっと持ち続けて大人になってほしいと願うものです。

市PTA連合会会長

こころの言の葉

～第7集 あふれ出る思い～

平成21年12月20日

発行 鹿児島市教育委員会
〒892-0816 鹿児島市山下町6-1
TEL(099)227-1941 FAX(099)227-1923

